

## 博士論文要旨

### 東アジアにおける四神思想の変遷

#### －日本の四神思想を中心に－

本研究は、古代中国や朝鮮半島諸国との国際文化交流を背景として日本に伝播した四神思想に注目し、日本における四神の作例について図像的特徴を明示するとともに、四神が用いられた場におけるその意味機能についても考究することで、日本における四神思想の諸相を明らかにするものである。

四神思想や四神相応、四神を描く中国・朝鮮半島・日本の古墳壁画や遺物をめぐっては、美術史学・考古学・古代史学・思想史学や保存科学などの分野からの研究が盛んに行われ、枚挙の遑もない。加えて、日本では、高松塚古墳やキトラ古墳の四神壁画の復元や保存のほか、それに関連した展覧会や壁画の特別公開などが行われ、図録も刊行されている。しかしながら、大陸から日本までを含めた東アジア全体を俯瞰した研究は、考古学や美術史学、あるいは民俗学などの個々のディシプリンの枠組みに限定されており、国際文化学という学問領域からアプローチした研究は管見の限り見られない。

筆者が四神研究を国際文化学に立脚し、学際的視野のもとに取り組む所以は、先行研究において未詳の課題が残されていることによる。すなわち、東アジアにおける四神の初期的な図像表現とその登場時期、各地域における四神図や四神を表現する遺物・儀礼等の用具に付された役割、四神図像の形成と発展にみる影響関係、日本独自の四神思想や四神相応にみる諸相などである。旧来の研究においても度々俎上に挙げられた問題であり、決して新規性のある課題ではない。しかしながら、これらの未詳の課題に取り組むにあたり、筆者は、東アジアという幅広い地域を俯瞰的な視野で捉え直すだけでなく、学際的で複眼的な視点を導入することによって、従来の四神研究を批判的に再検討し、東アジアにおける四神信仰、またアジアの中の日本における四神信仰の諸相を解明し、新知見を導きうるのではないかと、さらには今後の四神研究に僅かでも資するところがあるのではないかと考える。

#### 本論の構成

第一章では、中国における四神思想の起原と四神思想の発展を先学の研究を批判的に精査しつつ、再検討する。四神は、古代中国の神話世界において、東方青龍・南方朱雀・西方白虎・北方玄武と言い、天の四方の方角を司る靈獣として捉えられた。東アジアにおいて、四神の概念が成立した背景には、様々な自然哲学的思想（陰陽五行・風水）や民間信仰（神仙思想・日月星辰等）が関係している。

中国の戦国時代以前は、四神の天文概念や青龍・白虎・朱雀・玄武の組み合わせはまだ完全には成立していないことが現存作例からも明らかである。しかし、天文観測の詳細な記録が戦国時代に始まり、漢代以降、より一層の天文学の発達とともに、四神思想は、次第に役割や表現において発展を見ることとなる。

第二章では、古代中国の墳墓にみえる四神図、そして墓から出土された遺物に施された四神装飾の比較研究を試みながら、特に中国の四神画像および四神壁画構成の変遷過程を追究する。ついで、第三章では、古代中国の影響を受けた朝鮮半島における事例として、4世紀半ば頃から12世紀に至るまでの高句麗・百濟・高麗の四神図を取り上げながら、国際的な交流関係も考慮しつつ、図像から導きうる四神図の系譜を整理する。

第四章以降では、先述の大陸および朝鮮半島に関する3つの章を踏まえて、日本における四神思想および四神図を検討する。四神思想が大陸から日本に四神の思想や図像が伝わったのは、7世紀末とみられている。古代日本に伝播した四神思想は、陰陽五行思想と風水思想の観念と結び付けられ、四神の本来の概念にいくつかの新しい解釈や理解が加えられ、造形表象の上でも発展していく。この背景には当時活発に行われた国際交流のほかにも、律令国家の展開とその国家に重要な役割を果たしていた「陰陽道」の影響がある。日本独自の陰陽道に取り入れられた四神の概念は飛鳥時代の埋葬観念、朝廷の日常生活や都市計画、遺族の庭園や住宅の表現空間にも大きな影響を及ぼしている。

よって、第四章では、高松塚古墳とキトラ古墳の四神図を中心において、四神図の構成や表現を分析することで、古代東アジアの四神図の類似点を指摘し、比較検討することにより影響関係の可能性を考察する。また、日本で現存している四神を描く遺物や副葬品の図像的発展の変遷を明らかにする。

本稿は、四神思想のなかでも日本における動きに注目するものであるが、特に、第五章から第七章では、東アジアにおける四神信仰の表現に関して、中国・朝鮮・日本の朝廷の儀礼や日本の庶民の祭礼のために造立された「四神旗」・「四神幢」・「四神鉾」を考察の対象とし、それらのなかで四神にいかなる意味機能が負わされていたのかを明らかにする。

第五章では、古代中国と朝鮮の「四神旗」及び「四神幢」の図像や意味機能を整理し、これらを踏まえて、第六章では、日本の朝儀の威儀物である「四神旗」が古代から近代にかけてどのような変遷がみられるのかを、古代中国と朝鮮の「四神旗」及び「四神幢」と比較しつつ、考察する。古代日本の朝議における「四神旗」の建立は国家権力や天皇の超越性・威儀を整えるものであった。それが明治新政府のもとで、大陸を物語る唐風儀式の撤廃によって「四神旗」が姿を消すまでを社会的背景とともにその現象を精査する。

第七章では、中世以降、近世、近代、そして現代に続く祭礼に使用された「四神鉾」を取り上げる。権力構造が朝廷から武家へと移行する中で、かつて平安時代に朝廷において重要な役割を果たした陰陽道も中世以降は、社会の中枢が武家へと移行する中で民間へと新たな場を獲得し、神道とともに独自の展開を遂げる。「四神旗」もまさにその動きと連動して、新たな場を獲得するのである。つまり、武家社会、江戸幕府ないし譜代大名の直轄地では武家と庶民の日常にも普及していく。現存資料および文献資料等の記述から15世紀以降、都の朝儀用四神旗とは別に、新しい役割を果たす「四神旗」が

武将によって製作されるようになったことが分かる。そして、常陸水戸藩及び水戸家の帰依を受けていた地域では、17世紀後半以降、文化財の保存・復元活動をきっかけとして鎮守神社の建物とともに「四神旗」などの御祈願物も復元されるようになり、奉納活動が関東全般に広まった可能性が高い。さらに、江戸時代の「四神鉾」が江戸とその周辺地域の例祭の行列に加わり、祭りの威儀を整えるという祭礼形態を持つようになった。江戸時代の四神は庶民の暮らしに溶け込み、姿を変え庶民化していったことが窺えるのである。本章では、「四神旗」や「四神鉾」の現存作例や文献内の記述をもとに、そのあり方をそれらの背景にある社会的環境や文化的環境とともに跡付ける。

終章では、以上の全7つの章によって論究した事象について改めて整理し、総論として国際文化学の視点から見た日本における「四神相応」について論じる。すなわち、古代中国に起原を有する四神思想が東アジアにおいて大陸から朝鮮半島へと伝来し、また、絶えず大陸や半島からの影響を受けた日本では、豪族や朝廷という極めて限定された特権的地位にある人々の象徴的事物であるところのものから、近世にみる朝廷から武家へという権力構造の変化において、武家の所領という地理的条件や新たな場所を獲得した陰陽道の動きとともに、武家から庶民へと、すなわち庶民の祭礼における祭具へと独自の展開を遂げるという流れに、時代や地域の越境にとどまらず、結果的に、四神を用いる主体の社会的階級をも乗り越えていった四神思想のダイナミズムを浮き彫りにする。